

「うろこ(鱗)」の方言分布

石川 和子

知多半島で現われた語形は、ウロコ・ウロケ・コケラ・コケ・ハダの5種類である。

図1で黒丸の符号を与えたウロコは半島全域に見られ、国立国語研究所編『日本言語地図』217図でも、西日本を中心にほぼ全国的に分布している。また、標準語の「ウロコ」がもともとは、東京のことばではなく、関西の方のことばであったことも、この地図を大観しただけで分かる。

知多半島全域にみられるウロコに対して、ウロコとよく似た語形であるウロケは、(5767・38)の地点に、ウロコと併存してみられるが、この語形は、『日本言語地図』217図によれば、西日本のウロコ類と東日本のコケ類との境界線である岐阜・福井にもみられるものである。したがって、この語形は、ウロコとコケの混交によって、生まれた語形ではないかと、考えられる。

又、コケラは、佐久島・篠島の島部にみられるだけで半島には見られない語形である。佐久島(5762・00)と篠島(5790・84)に見られるコケラは、標準語形ウロコと併用でみられ、注記に<コケラは子供の時に使用>とインフォーマントの新古の区別が記されている。『日本言語地図』217図では、コケラは関東一帯を中心に愛知・静岡・長野そして新潟に

見られる。愛知県では、三河湾沿岸そして渥美半島まですべてコケラが現われている。したがって、図の島部にみられるコケラは三河からの影響と考えられる。

コケラと関係が深いと思われるコケは、半島北部(47 28・19)に1地点みられる。1地点だけなので、なんとも言い難い。しかし、『日本言語地図』217図でコケは、愛知・岐阜・長野の境界線あたりから、ずっと北の方に伸びていることから、そちらの影響ではないかと思われる。

また、コケラとコケは、東日本一帯に分布しているので、どちらが古く、どちらが新しいのかという新古の判断は分布からは、つけ難い。本図半島の地図に於ても、語形の現われている地点が、1、2地点のため詳細は掴めない。

ハダという語形は、これも半島南部伊勢湾沿い(57 43・09)に1地点だけ見られる。この語形は、『日本言語地図』217図で見ると、三重・和歌山の太平洋岸沿いに集中して見られ、その他に静岡県御前崎に1地点見られるのが特徴である。(57 43・09)のインフォーマントは漁師で、<志摩半島との舟の交流も盛んだった。>と答えているところから、まちがいなく三重の方から侵入してきた語形のようなのである。しかし必ずしもその語形の現われている地点が多い方から侵入した

とは、断定できない。これに関しては、
尚一層の検討を要する。

また、この語形は、人間の「膚」との
関連があるようで、恐らく人の膚は白く
てすべすべしている。魚の表面も透きと
おってすべすべしている。したがって、
双方似かよっているので魚の方も人間と
同様ハダと言うようになったのではない
かと思われる。

このうろこという項目に関しては、標
準語形ウロコ以外の語形が5地点しか現
われず、ほとんど標準語ウロコを使用し
ている。しかしこれは、我々が漁業者で
なく農業を営むインフォーマントを対象
とした為で、漁業者ならば、半島南部の
漁業町では、もっと多くの地点で共通語
ウロコ以外の語形が現われたかもしれない。

「(じゃんけんの)ぐう・ちょき・ぱあ」

の方言分布の解釈

加藤 郁子

この項目は、じゃんけんする時に使う
「ぐう・ちょき・ぱあ」を手で形作って、
それぞれの呼び名について答えてもらう
ものである。

まず「ぐう」については、一三種類の
語形が得られた。図2によると、全体に
広がっているのはイシである。そして、
南に少しまとまりをみせて、他にも点在
しているのがグーである。グーは、一三
三地点中二六地点であり、うち六地点は
イシとの併用である。(3325・47, 4679・
47, 5778・47, 5641・57, 6541・57, 6663・
57)

他に、イシナ・ニギリ類・ニギリコブ
シ類・ゲンコ・ゲンコツ・ギユウ・キュ
ー・プー・ニュー・ウン・クロの語形があ
る。『広辞苑』によると、イシナ——石
の意。ニギリ——にぎること。にぎった
もの。ニギリコブシ——固く握ったこぶ

し・げんこ・げんこつ・ゲンコ——にぎ
りこぶし・げんこつ・片手。ゲンコツ—
にぎりこぶし・げんこ。とあるようにこ
れらは、じゃんけんする時、手を握って
出す動作・形からきたものと考えられる。

「ちょき」については、一〇種類の語
形が得られた。図3によると、全体に広
がっているのはハサミである。そして、
南に少しまとまりをみせて、他にも点在
しているのがピー・チョキである。ピー
は、一三三地点中一一地点でありうち四
地点はハサミとの併用である。(3325・
47, 4679・47, 5488・57, 6663・57) ま
たチョキについては、一三三地点中八地
点であり、うち一地点がハサミとの併用
である。(5870・57)

他に、チョ・チョイ・チー・チャー・
ニュー・キュ・ペーの語形である。チョ・
チョイについては、チョキの変種ではな

いかと思われる。

「ばぁ」については、七種類の語形が得られた。図4によると、全体に広がっているのはカミである。そして、カミを押し分けるように点在しているのがパーである。パーは、一三三地点中三三地点であり、うち四地点はカミとの併用である。(3325・47, 4679・47, 5778・47, 6663・57) また、フロシキ (5670・57, 6747・57)・フルシキ (8800・57)・ヒロシキ (6719・57) は半島先端にまとまってみられる。フルシキについては、半島中央にも一地点 (9623・47) 現われている。これらは、手を広げる形がふろしきに似ているところからきているのではないかと思われる。

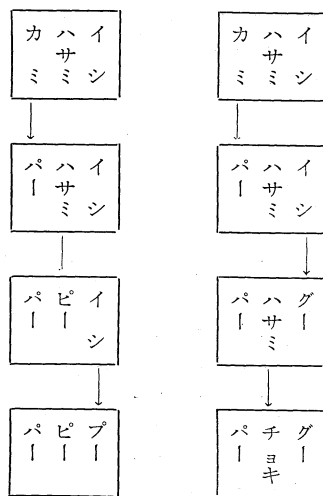
他に、ヒラ・バラの語形がある。

次に、これら「ぐう」「ちょき」「ばぁ」を合わせて考えてみると、なんといっても多いのがイシ・ハサミ・カミの形である。この形は、以前知多半島全域で使用していたものと考えられる。というのはグー・チョキ・パーなどを使用している地域でも、調査者のイシ・ハサミ・カミの誘導によって、昔使用していたと答えているインフォーマントが多いためである。これらのことから、イシ・ハサミ・カミを基盤として、標準語形のグー・チョキ・パーの侵入状態について考えてみたい。

一番多く侵入しているのは、カミの部分でパーとなっているのが三四地点である。これは、カミが一番言いづらく、また変化しやすい語形であることをものがたっている。ここで、イシ・ハサミ・パーという形が作られる。次に変化の多いのが、イシの部分でグーとなっているの

が二六地点である。そこで、グー・ハサミ・パーという形に変化し、最後に変化したと考えられるのがハサミの部分で、チョキというのが八地点である。そしてここでグー・チョキ・パーの形ができるこのグー・チョキ・パーは、入り方が個別であるために、変化の度合いが、それぞれ違うことが考えられる。図3では、チョキよりもピーが目立っているが、これはグー・ハサミ・パーからの変化ではなく、イシ・ハサミ・パーからできたものと思われる。この形のハサミがピーに変化し、さらにプー・ピー・パーと変化したと思われる。この形は、萩 (4793・47) 一地点でしかみられないが、この付近にピーを使用する地点が二地点 (4322・47, 4679・47) があるので、ハ行音の統一からできたものではないかと思われる。またピーについては、現在一番新しい語形ではないかと思われる。

以上のことを、図式に表わしてみると次のようである。



男親の男親を何といいますか

加藤 富佐恵

この質問に対する答えを分類すると、オジーサン類・マゴジーサン類・ジーサン類・オージーサン類の四類とその他と無回答に分けられる。

もっとも多く得た語形は、オジーサン・オジーチャンを含むオジーサン類で半島全域に分布している。『日本言語地図』(141図)でも、OZ I(I)SANは特にまとまった分布領域を持たず全国的に分布している。

マゴジーサン・マゴジッサマ・マゴジジーを含むマゴジーサン類は半島南部に集中して分布がみられる。『日本言語地図』(同)では、MAGOZ I(I)SANは太平洋沿岸の三重県南部・愛知県知多半島・静岡及び新潟・山形に分布している。三重・静岡そして知多半島にも分布しているところから、この語形は知多においてもっとも多く使用されていたと思われる。

ジーサマ・ジージーを含むジーサン類、オージッサンを含むオージーサン類は共に点在していてまとまりがない。

図5から考えられる傾向は、マゴジーサン類が広く分布していたところに標準語形のオジーサンを含むオジーサン類にその座を奪われて、現在マゴジーサン類が地域的なまとまりを持って残っている

のではないかとということである。

次に「ひいおじいさん」で得た語形について述べよう。(図6)

「15(前の質問)の人の男親を何といいますか」。

この質問の答えを、マゴジーサン類・オジーサン類・ヒーオジーサン類・ヒコジーサン類・ヒーマゴジーサン類・オージーサン類・その他・無回答に分類すると、ヒーオジーサン・ヒージーサンを含むヒーオジーサン類が半島全域に分布して勢力を持っていることが分かる。これは標準語形のヒーオジーサンが知多半島においてかなり分布しているためである。

ヒコジーサン・ヒコジッサを含むヒコジーサン類は半島南部に分布領域を持っている。『日本言語地図』(142図)をみると、「おじいさん」で、MAGOZ I(I)SANが分布している三重県南部・静岡・新潟・山形に、HIKOZ I(I)SANがその地域を含め更に秋田・北海道にも分布している。このことからこの語形が過去において使用されてその残存として北海道にみられるのではないと思われるが定かではない。

半島東側に多く分布がみられるマゴジーサン・マゴジッサを含むマゴジーサン

類は、「おじいさん」・「ひいおじいさん」の両項目に共通して、「おじいさん」(図5)で半島西側にマゴジーサン類が分布していたのと対称的である。

「おじいさん」と「ひいおじいさん」の語形の関係を図5でマゴジーサン類を得た地点についてみると、表1(表参照)のようになっている地点が大部分であり、この関係は知多にもっとも広く分布していた型ではないかと思われる。そして「おじいさん」の意味に標準語形のオジーサンが広まるにつれて、マゴジイサンが「ひいおじいさん」の意味に移動して、新しく表2(表参照)の型ができたと思われる。

祖 父		曾祖父	
マゴジーサン		ヒコジーサン	
		表 1	
オジーサン		マゴジーサン	
		表 2	
オジーサン		ヒーオジーサン	
		表 3	

表2の型は、「ひいおじいさん」に標準語形のヒーオジーサンが広く分布しているため、表3への過程にすぎないのではないかと思われるが、尚調査検討を要する。

「ふろしき包をしょう」の方言分布

鈴木 恵子

人がふろしき包を背負っている絵を見せ「荷物をこうすることを、どうすると言いますか。」と質問し、ここでは背に(両肩に)物をしょう語形を求めたのである。

現われた語形が多く、そのまま地図化すると秩序の無い分布図になった。

そこで、現われた語形のショウ・ショコナウ・ショーナウ・ショコネル・ヨコネル・ショイネル・ショネル・オウ・セオウ・カツグ・カズク・カツクの語の末尾部に注目し、ショウ・～ナウ類・～ネル類・～オウ類・カツグ類と分類してみると、比較的秩序ある分布が見られたの

である。(図8)

さて図9を一見して判るように、半島東部に～ナウ類が分布し、半島西部には～ネル類が分布を示している。

また、半島全域に拡がっているショウを『日本言語地図』第65図でみても、東日本全域に拡く分布しているのである。

そこで、古く半島全域には、ショウが拡がり、そこへ北東部から『日本言語地図』第65図にみられるショコナウが、侵入してきたと思われる。このショコナウは、ある行為をするという意味を持つ接尾語「ナウ」が、昔からある「背負子(しょいこ)」という道具を、ナウとい

う意識で、

シヨイコナウ→シヨイコナウ→
→シヨコナウ

と、なったとも考えられよう。

また、シヨーナウ(47 26・28)・(47 53
・74)・(47 55・78)・(47 74・80)・(47
43・65)は、シヨコナウが伝播して行く
うちに「コ」が、何らかの作用で消去脱
落したとも、考えられる。

なお、(57 65・58)のシヨコウについて
も同様に、シヨコナウが東部沿岸寄りに
伝播しながら南下して行く間に、「ナ」が
脱落したのではないとも思われるが、一
地点のみであるので断言は控えたい。

半島西部からは、『日本言語地図』第
65図にみられるオイネルが侵入し、北西
部より侵入したオイネルは、先に侵入し
ていたシヨコナウと混交を起し、

オイ [ネル] }
[シヨコ] ナウ } → [シヨコネル]

と、なったと考えられる。

また、南西部からもオイネルが侵入し
たのではないと思われる。(57 43・09)
にある語形シヨイネルは、シヨウとオイ
ネルの混交形ではないかと思われ、この
地点は近年になり港が開かれた所でもあ
る。

シヨウ }
オイネル } → [シヨイネル]

次に、南部に現われているカツグ類
は、半島独自のものらしく、『日本言語
地図』第65図でみられる北陸・新潟とは
関係が薄いように思われる。

ここで、なぜカツグ類が南部にみられ
るのか。一つには、両肩にふろしき包を
「しょう」ことも、この地域では「担ぐ」
の意味範囲に入れているのではないかと
考えられること、もう一つは「担ぐ」の
語形を求める質問のすぐ後に、両肩でこ
うする動作は何と言うかと尋ね、インフ
ォーマントの意識に混乱を生じさせ、そ
の結果現われた分布かもしれない、いず
れにしても南部に集中してみられること
を、述べるに留めておく。

一方、半島中央部寄りを、～オウ類が
分布している。現われた地点をよくみる
と、いわゆる古形が残存しやすいと言わ
れている交通の不便な辺境がほとんどで
あるのに、現われた語形は、(57 55・88)
のオウを除いて、すべて標準語形のセオ
ウである。

このことから、辺境地ほど新しい語形
を受け入れやすいとも考えられるのであ
る。

きれいに[掃除する]

野 川 宏 子

この項目については、座敷などを掃除した後どのようなになったと言うかについての質問項目である。質問形式としては「C式」である。

調査によって現われた語形としては、ウツクシ〜類・キレイ〜類とその他（サッパリ〜類・ケッコオ〜類など）による語形で地図化されたものである。

地図を大観してみると図にはキレイ〜類が広く分布している。この語形は『日本言語地図』48を参照してみると、北海道・東北（岩手・宮城の一部を除く）・北陸（新潟を除く）・中部（愛知を除く）・関西・九州（鹿児島を除く）などを除く地域に多く現われているものであって、これらよりこの語形は関東を中心として標準語化されているものである。

また古い語形とされているものとしては、キレイ〜類が分布している以外の多くの地域で分布している語形ウツクシ〜類であるが、この語形は関西を中心とするものである。

図10においてこの語形ウツクシ〜類はキレイ〜類が広い地域に分布して行くことにより周辺においやられ、次第に周りに残存しながら、キレイ〜類へと変化していったようである。つまりウツクシ〜類は、知多半島において古形を残してい

るであろうと考えられる地域に多く残しているもので、インフォーマントの答えの備考においても「昔はウツクシになったと言っていたが、今はキレイになった」と言うようになった。＞と注意書きされていた点が数地点あったことから考えられる。

またその地の語形としては『日本言語地図』48において瀬戸内海・静岡・愛知の三河の一地域に現われている。ケッコオ〜類であるがこれは図10においては(58 62・00)・(58 90・84)に現われて来ている語形である。これらは船などの海上交通などの影響や三河に近い島部であるため現われた語形ではないかと考えられるものである。

また『日本言語地図』48の岩手・宮城の一部に分布している語形サッパリ〜類は、図 では半田市周辺の(47 44・40)・(47 66・83)・(47 67・78)・(47 76・16)の数地点と(47 74・80)・(57 16・88)・(67 88・00)などに分布している語形でこれについてはそうじの後の気持ちなどより生じたことばであろうと考えられるもので、すべてがかたづきホットー息という時などに言うことば、語形として出たのではないかと考えられるのである。

次に語形としては、(47 86・38)に現

われたセイケツ〜類であるが、これも前語形と同じ気持ちの時に出了ものと考えられる。

このようにサッパリ〜類・セイケツ〜類などやその他(ヨーナッタ〜類)はすべて、そうじをして安心したことより出た語形と思われるが、これらの多くがキレイ〜類・ウツクシ〜類などの併用として用いられている。このことからウツクシ〜類・キレイ〜類の二語形の意識は強くあるが、時々その他の語形をも用いることがあると考えられる。

また現在、標準語形と考えられるキレイ〜類と、古形であろうと考えられるウツクシ〜類については相当意識が個人・地域により異って来ているように考えられ、それらについてももう一度考えてみることも必要なのではないかと思われる。

また『日本言語地図』においては「きれいに」という語形をそうじした後だけでなく、虹などについても調査を行なっているので、知多半島においても調査されることを願うものであり、今後の検討をまつものである。

知多半島の

言語地理学的研究

⇐ 本文 横組 (1)~(8) 66ペ〜73ペ
図版 (9)~(18) 56ペ〜65ペ ⇒

訂正

図版(14)図6 凡例2行目 オージーサンをオジーサンと訂正する(3行目オージーサンはそのまま)。

図 1

愛知県知多半島言語地図

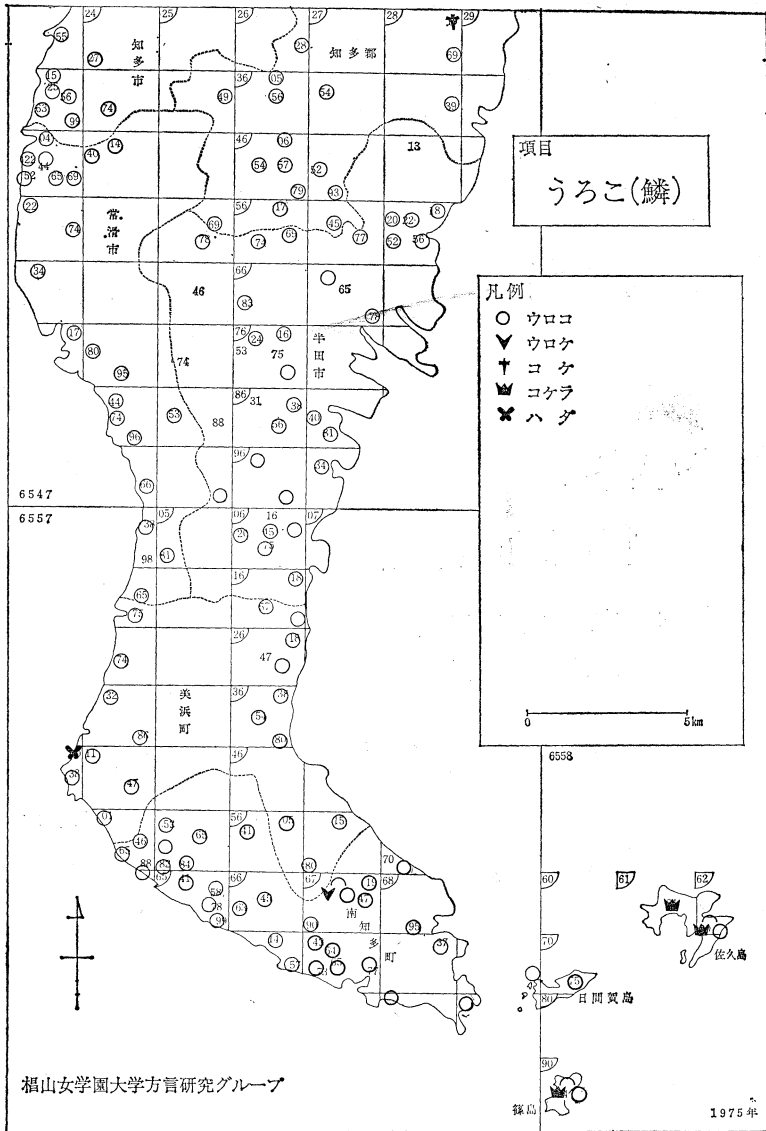


図 2

愛知県知多半島言語地図

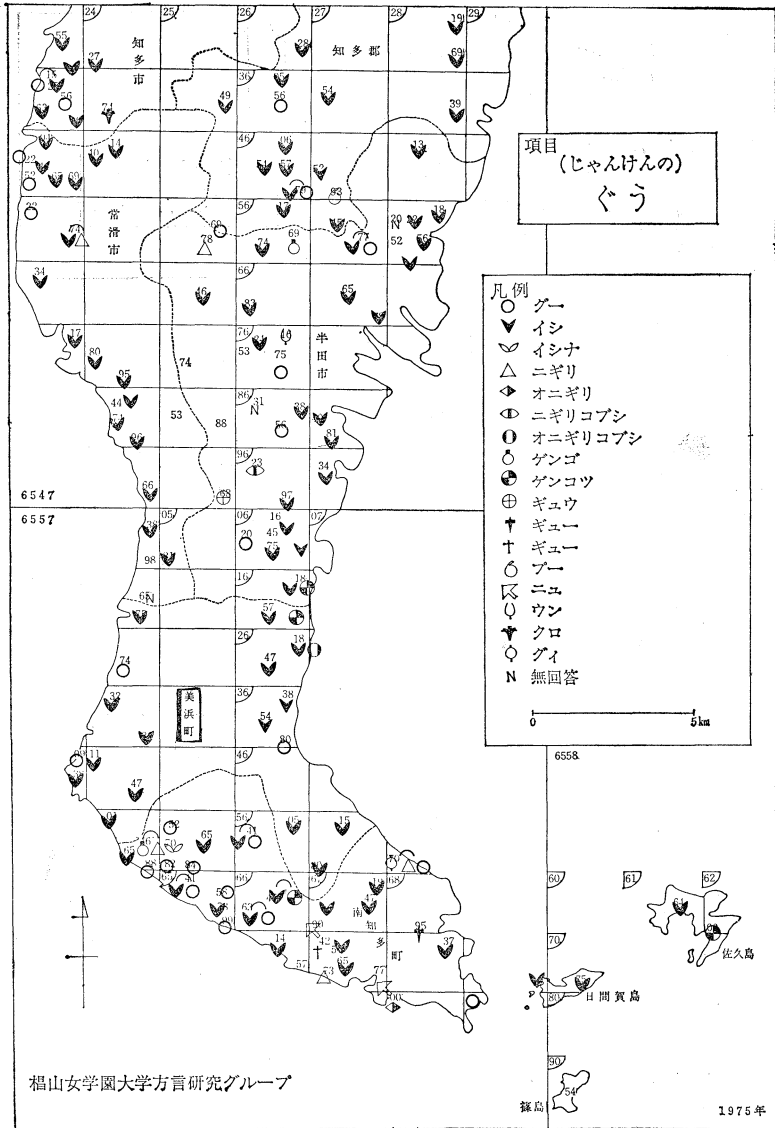


図 3

愛知県知多半島言語地図

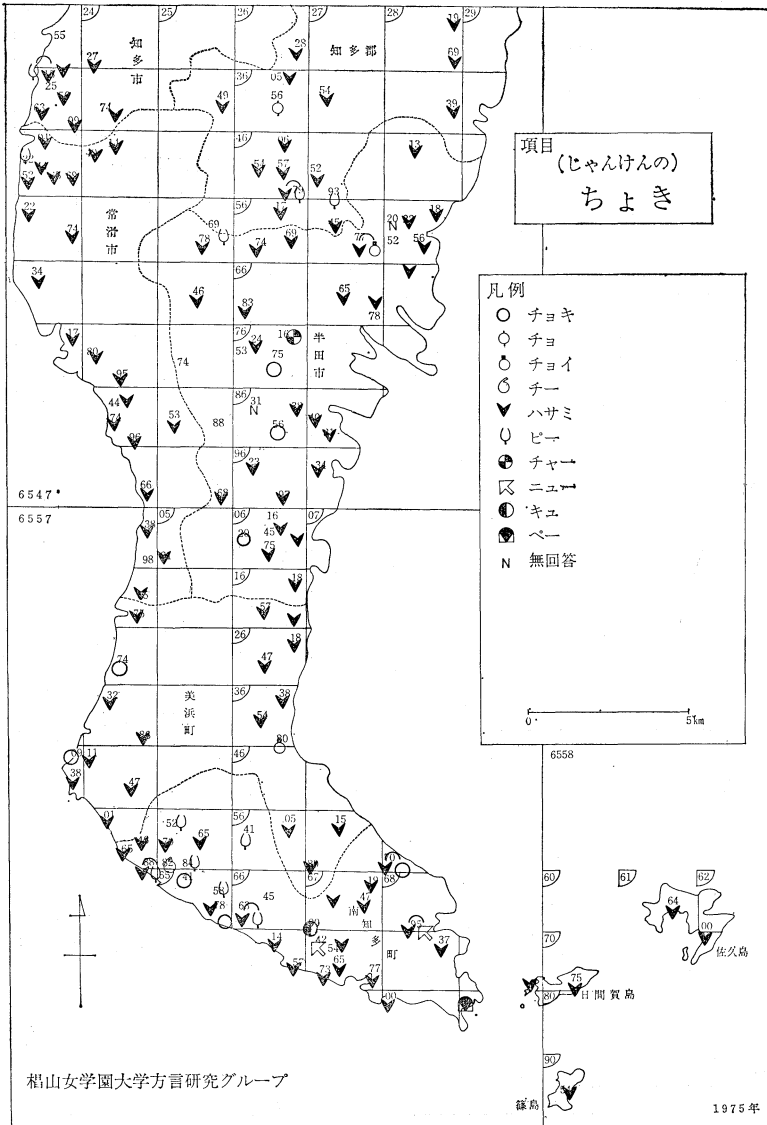


図 5

愛知県知多半島言語地図

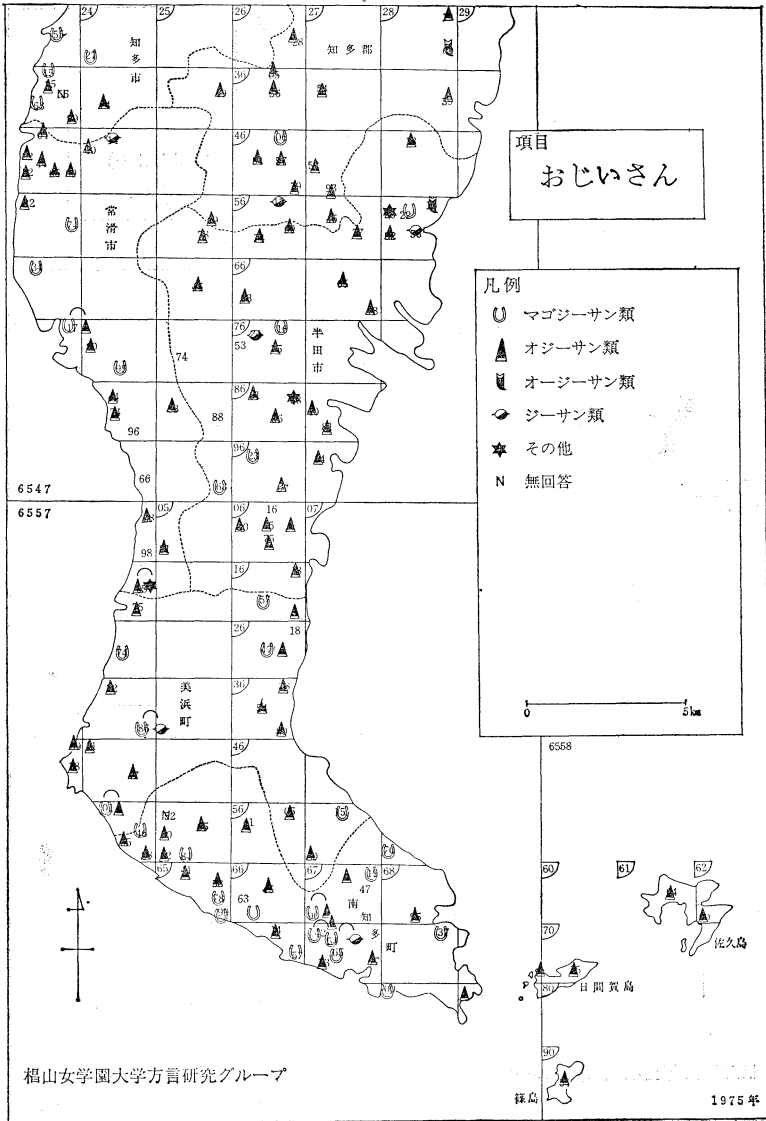


図 6

愛知県知多半島言語地図

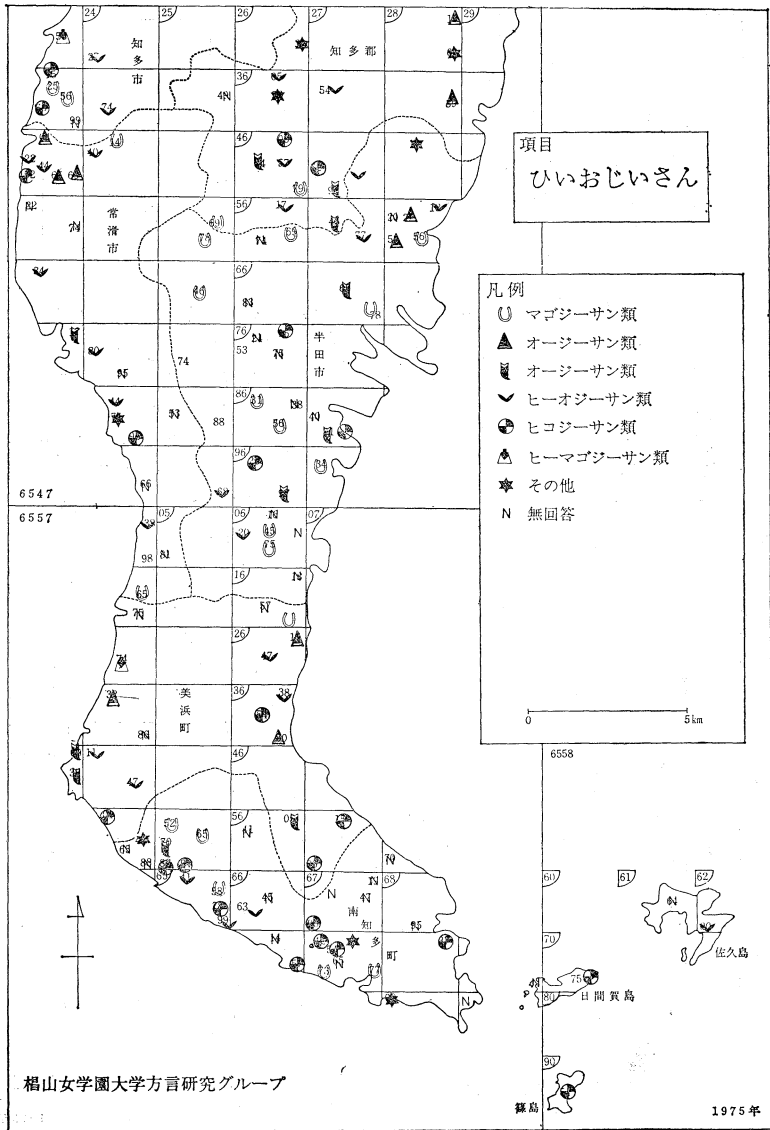
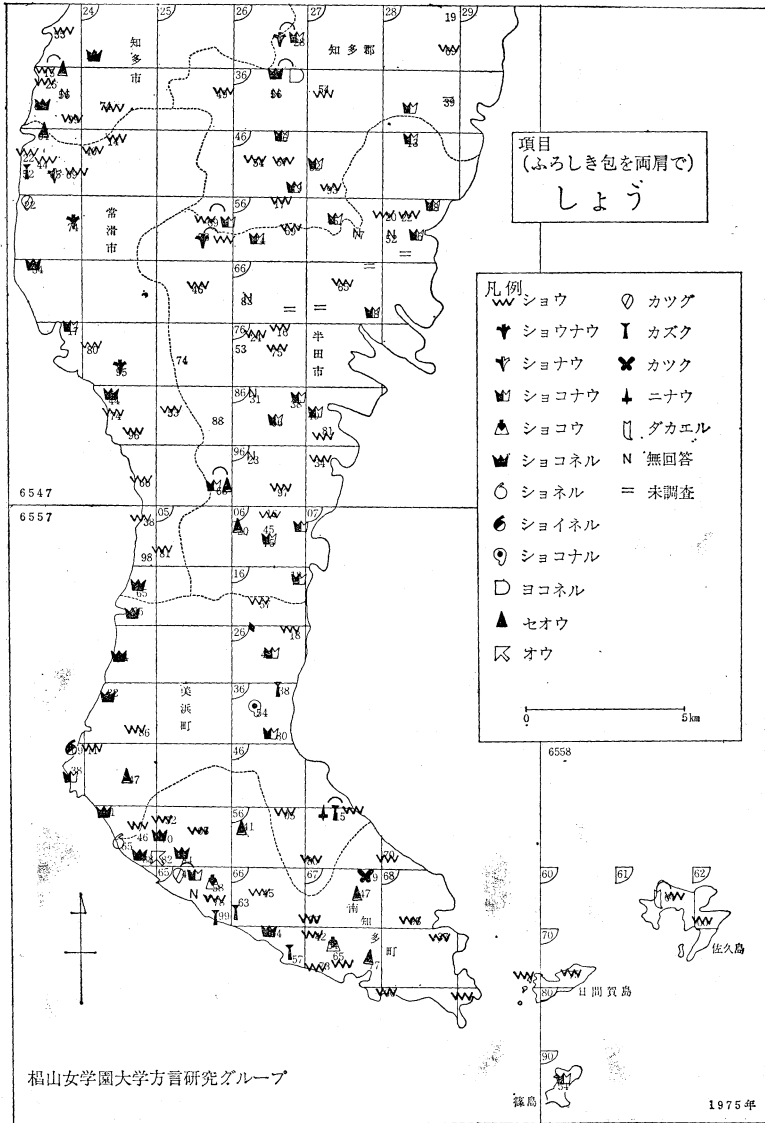


図 7

愛知県知多半島言語地図



愛知県知多半島言語地図

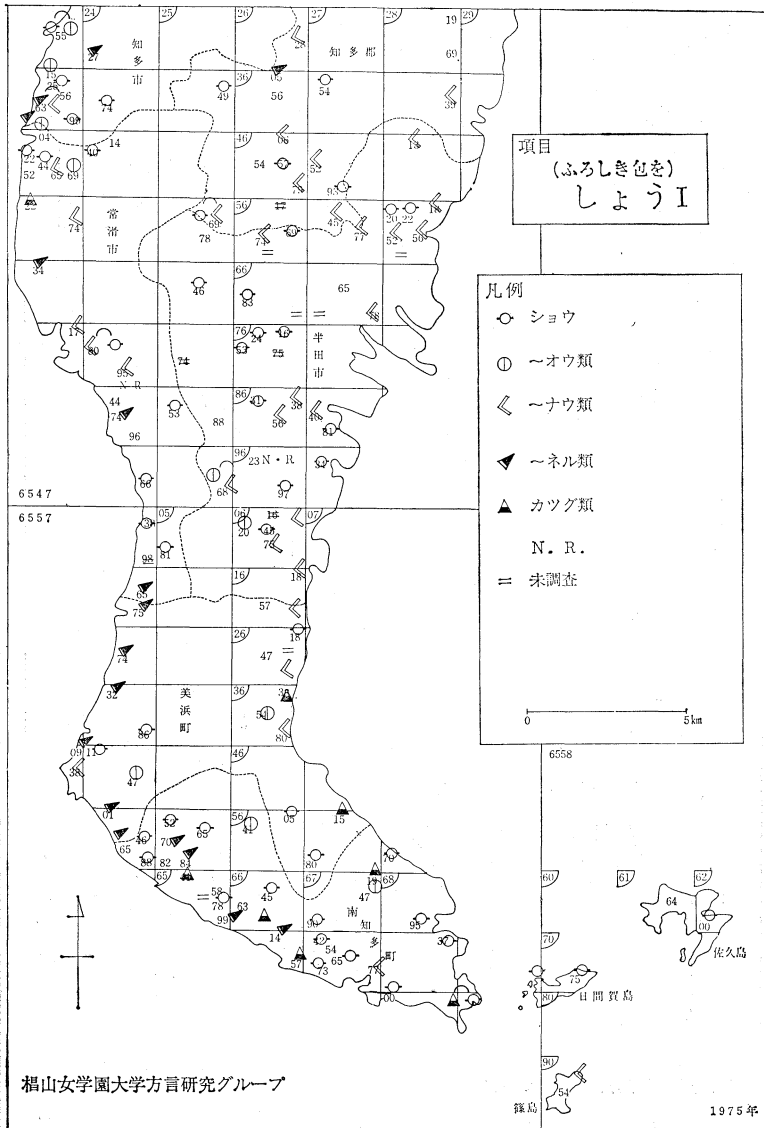


図 9

愛知県知多半島言語地図

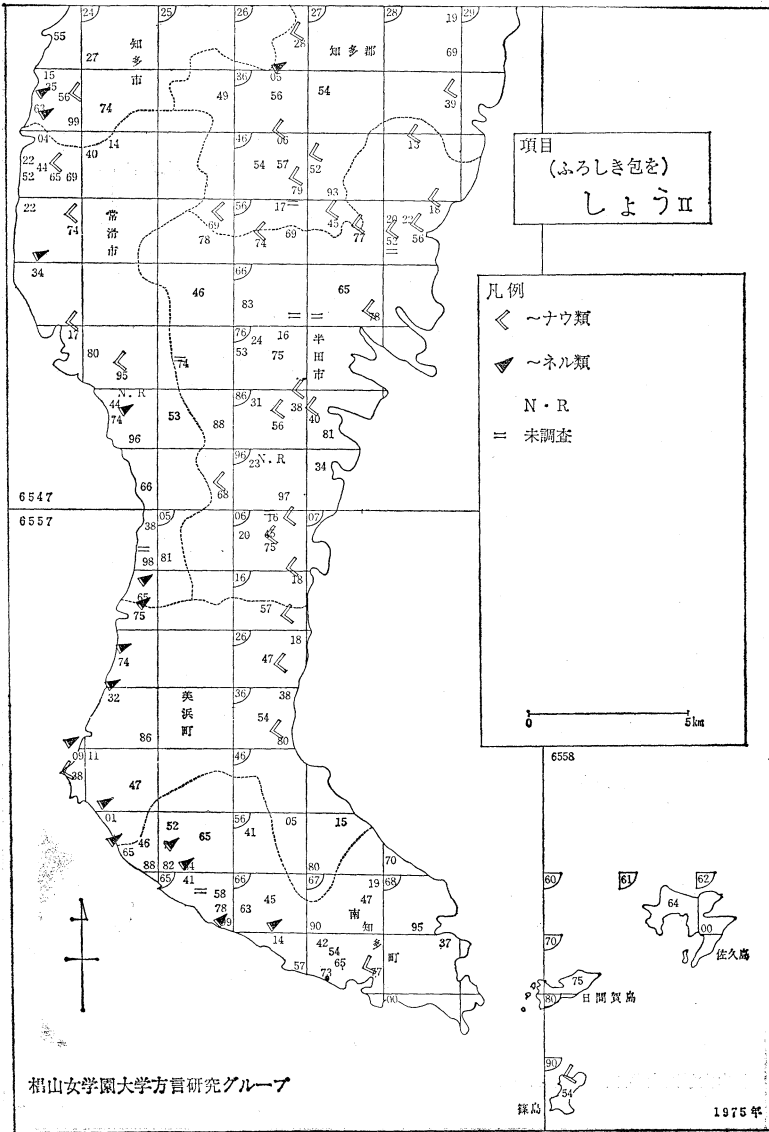


図 10

愛知県知多半島言語地図

